



# 狂人日記

魯迅

井上紅梅 訳



青空文庫



青空  
文庫

某君兄弟数人はいずれもわたしの中学時代の友達で、久しく別れているうち便りも途絶えがちになった。先頃ふと大病たいびょうに罹かかった者があると聞いて、故郷こきょうに帰る途中立寄ってみるとわずかに一人に会った。病気に罹ったのはその人の弟で、君がせっかく訪ねて来てくれたが、本人はもうスツカリ全快して官吏候補となり某地へ赴任したと語り、大笑いして二冊の日記を出した。これを見ると当時の病状がよくわかる。旧友諸君に献じてもいいというので、持ち帰って一読し

てみると、病気は迫害狂の類で、話がすこぶる  
こんがらがり、筋が通らず出鱈目でたらめが多い。日附ひづけ  
は書いてないが墨色すみいろも書体も一樣でないところ  
を見ると、一時じに書いたものでないことが明ら  
かで、間々まま聯絡れんらくがついている。専門家が見たら  
これでも何かの役に立つかと思つて、言葉の誤  
りは一字もなおさず、記事中の姓名だけを取換  
えて一篇にまとめてみた。書名は本人平癒後自  
ら題したもので、そのまま用いた。七年四月二  
日しるす。

今夜は大層月の色がいい。

乃公おれは三十年あまりもこれを見ずにいたんだが、今夜見ると気分が殊ことの外ほかサツパリして初めて知った、前の三十何年間は全く夢中であつたことを。それにしても用心するに越したことはない。もし用心しないでいいのなら、あの趙家ちやうけの犬めが何だつて乃公の眼を見るのだろう。

乃公が恐れる理わけがある。

## 二

今夜はまるきり月の光が無い。乃公はどうも変だと思つて、早くから気をつけて門を出たが、趙貴翁ちやうじいさんの目付めつきがおかしいぞ。乃公を恐れているらしい。乃公をやつつけようと思つているらしい。ほかにまだ七八人もいるが、どれもこれも頭や耳を密著くつつけて乃公の噂をしている。乃公に見られるのを恐れている。往来の人は皆そんな風だ。中にも薄気味の悪い、最もあくどい

奴は口をおツびろげて笑つていやがる。乃公は頭の天辺てうべんから足の爪先つまさきまでひいやりとした。解つた。彼らの手配がもうチャンと出来たんだ。乃公はびくともせず歩いていけると、前の方で一群の子供がまた乃公の噂うわさをしている。目付は趙貴翁てうきゆうと酷似そっくりで、顔色は皆鉄青てつせいだ。一体乃公は何だつてこんな子供から怨みを受けているのだろう。とてもたまつたものじゃない。大声あげて「お前は乃公にわけを言え」と怒鳴つてやると彼らは一散に逃げ出した。

乃公と趙貴翁とは何の怨みがあるのだろう。往来の



人にもまた何の怨みがあるのだろう。そうだ。二十年前、古久先生こきゆうの古帳面ふるちようめんを踏み潰したことがある。あの時古久先生は大層不機嫌であつたが、趙貴翁と彼とは識合しりあいでないから、定めてあの話を聞伝ききつたえて不平を受け、往来の人までも乃公に怨みを抱くようになったのだろう。だが子供等は一体どういうわけだえ。あの時分にはまだ生れているはずがないのに、何だつて変な目付でじろじろ見るのだろう。乃公を恐れているらしい。乃公をやっつけようと思つていららしい。本当に恐ろしいことだ。本当に痛ましいことだ。

おお解った。これはてつきりあいつ等のお袋が教え  
たんだ。

## 三

一晚じゆう睡ねむれない。何事も研究してみるとだんだん解とつて来る。

彼等かれらは——知ち県けんに鞭打たれたことがある。紳士から張手はりてを食くらつたことがある。小役人せやくにんから鼻かかあを取られたことがある。また彼等の親達おやたちが金貸かんだいからとつちめられて無む理り死じをさせられたことがある。その時の顔色でもきのうのようなあんな凄あはいことはない。

最も奇怪に感じるのは、きのう往来で逢ったあの女だ。彼女は子供をたたいてじつとわたしを見詰めている。「叔さん、わたしやお前に二つ三つ咬みついてやらなければ気が済まない」これにはわたしも全くおどかされてしまったが、あの牙ムキ出しの青ツ面が何だかしらんが皆笑い出した。すると陳老五がつかつか進んで来て、わたしをふんづかまえて家へ連れて行つた。家の者はわたしを見て知らん振りして書齋に入ると鑰を掛け、まるで鶏鴨のように扱われているが、このことはどうしてもわたしの腑に落ちない。

四五日前に狼村おおかみむらの小作人が不況を告げに来た。彼は

わたしの大アニキおおと話をしていた。村に一人の大悪人だいたくじん

があつて寄つてたかつて打殺うちころしてしまつたが、中には

彼の心臓をえぐり出し、油煎あぶらいりにして食べた者がある。

そうすると肝が太くなるという話だ。わたしは

一言差出口ひことぎしでぐちをすると、小作人と大アニキはじろりとわ

たしを見た。その目付がきのう逢つた人達の目付に寸

分違いのないことを今知つた。

想い出してもぞつとする。彼等は人間を食い馴なれて

いるのだからわたしを食わないとも限らない。

見たまえ。……あの女がお前に咬みついてやると言つたのも、大勢の牙ムキ出しの青面の笑も、先日あおつらの小作人の話も、どれもこれも皆暗号だ。わたしは彼等の話の中から、そつくりそのままの毒を見出し、そつくりそのままの刀を見出す、彼等の牙は生白なましろく光つて、これこそ本当に人食いの道具だ。

どう考えても乃公は悪人ではないが、古久先生の古帳面に蹶躪けつまついてからとても六ツむかしくなつて来た。彼等は何か意見を持っているようだが、わたしは全く推測が出来ない。まして彼等が顔をそむけて乃公を悪人

と言い布ふらすんだからサツパリわからない。それで想  
い出したが、大アニキが乃公に論文を書かせてみたこ  
とがある。人物評論でいかなる好人物でもちよつとく  
さした句があると、彼はすぐに圈けん点てんをつける。人の  
悪口あくこうを書くのがいいと思つていたので、そういう句が  
あると「翻ほん天てん妙手みょうしゅ、衆と同じからず」と誉め立てる。  
だから乃公には彼等の心が解るはずがない。まして彼  
等が人を食おうと思ふ時なんかは。

何なんに限らず研究すればだんだんわかつて来るもので、  
昔から人は人をしよつちゆう食べている。わたしもそ

れを知らないのじゃないがハッキリ覚えていないので歴史を開けてみると、その歴史には年代がなく曲り歪んで、どの紙の上にも「仁道義徳」というような文字が書いてあった。ずっと睡ねむらずに夜中まで見詰めていると、文字の間からようやく文字が見え出して来た。本一ぱいに書き詰めてあるのが「食人」の二字。

このたくさんの文字は小作人が語った四方山よもやまの話だ。それが皆ゲラゲラ笑い出し、気味の悪い目付でわたしを見る。

わたしもやつぱり人間だ。彼等はわたしを食いたい



と  
思  
っ  
て  
い  
る。  
。

## 四

朝、静坐せいざしていると、陳老五が飯を運んで来た。野菜が一皿、蒸魚むしうおが一皿。この魚の眼玉は白くて硬く、口をぱくりと開けて、それがちようど人を食いたいと思っっている人達のようにだ。箸をつけてみると、つるつるぬらぬらして魚かしらん、人かしらん。そこではらわたぐるみそつくり吐き出した。

「老五、アニキにそう言ってくれ。乃公は気がくさく

さして堪らんから庭内を歩こうと思う」

老五は返事もせずに出て行つたが、すぐに帰つて来て門を開けた。

わたしは身動きもせず、彼等の手配を研究した。彼等は放すはずはない。果してアニキは一人のおやじを引張つて来てぶらぶら歩いて来た。彼の眼には気味悪い光が満ち、わたしの看破りを恐れるように、ひたすら頭を下げて地に向い、眼鏡の横べりからチラリとわたしを眺めた。アニキは言った。

「お前、きょうはだいいいようだね」

「はい」

「きょうはかせんせい何先生に来ていただいたから、見てもらいな」

「ああそうですか」

実際わたしはこの親爺が首斬役であるのを知らずにいるものか。脈を見るのをつけたりにして肉付を量り、

その手柄で一分の肉の分配にあずかろうというのだ。

乃公はもう恐れはしない。肉こそ食わぬが、胆魂はきもたまお

前達よりよっぽど太いぞ。二つの拳固を差出して彼がどんな風に仕事をするか見てやろう。親爺は坐つてい

ながら眼を閉じて、しばらくはさすつてみたり、またぽかんと眺めてみたり、そうして鬼の眼玉を剥き出し「あんまりいろんな事を考えちゃいけません。静かにしているとじきに好くなります」

フン、あんまりいろんな事を考えちゃいけません、静かにしていると肥りまさあ！ 彼等は余計に食べる

んだからいいようなものの乃公には何のいいことがある。じきに「好くなります」もないもんだ。この大勢の人達は人を食おうと思つて陰かげになり陽ひなたになり、小盾になるべき方法を考へて、なかなか手取早く片付けて

しまわぬ、本当にお笑草わらいぐさだ。乃公は我慢しきれなくなつて大声上げて笑い出し、すこぶる愉快になつた。自分はよく知つている。この笑声の中には義勇と正気がある。親爺とアニキは顔色を失つた。乃公の勇氣と正気のために鎮圧されたんだ。

だがこの勇氣があるために彼等はますます乃公を食あやかいたく思う。つまり勇氣に肖あやかりたいのだ。親爺は門を跨いで出ると遠くも行かぬうちに「早く食べてしまひましよう」と小声で言つた。アニキは合点した。さてはお前が元なんだ。この一大発見は意外のようだが決

して意外ではない。仲間を集めて乃公を食おうとするのは、とりもなおさず乃公のアニキだ。

人を食うのは乃公のアニキだ！

乃公は人食ひとくいの兄弟だ！

乃公自身は人に食われるのだが、それでもやっぱり人食の兄弟だ！

## 五

この幾日の間は一步退いて考えてみた。たといあの親爺が首斬役でなく、本当の医者であつてもやはり人食人間だ。彼等の祖師李時珍りじちんが作った「本草ほんそう何とか」を見ると人間は煎じて食うべしと明かに書いてある。

彼はそれでも人肉を食わぬと言うことが説き得ようか。家のアニキうちと来ては、全くそう言われても仕方がない。彼は本の講義をした時、あの口からじかに「子こを



易<sup>か</sup>へて而<sup>しか</sup>して食<sup>くら</sup>ふ」と言つたことがある。また一度、偶然ある好からぬ者に対して議論をしたことがある。その時の話に、彼は殺されるのが当然で、まさにその肉<sup>くら</sup>を食<sup>くら</sup>いその皮に寝<sup>い</sup>ぬべしと言つた。当時わたしはまだ小さかつたが、しばらくの間胸がドキドキしていた。先日狼<sup>ろう</sup>村<sup>そん</sup>の小作人が来て、肝を食<sup>くら</sup>べた話をすると、彼は格別驚きもせず絶えず首を揺<sup>うご</sup>り動<sup>うご</sup>していた。それを見たことか、おお根が残酷だ。「子を易<sup>か</sup>へて而<sup>しか</sup>して食<sup>くら</sup>ふ」がよいことなら、どんなものでも皆易<sup>か</sup>えられる。どんな人でも皆食<sup>くら</sup>い得られる。わたしは彼の講義を迂

潤に聞いていたが、今あの時のことを考えてみると、彼の口端には人間の脂がついていて、腹の中には人を食いたいと思う心がハチ切れるばかりだ。

六

真黒けのけで、昼かしらん夜かしらん。趙家の犬が  
哭き出しやがる。

獅子に似た兇心、兔の怯懦きょうだ、狐狸こりの狡猾……

## 七

わたしは彼等の手段を悟った。手取り早く殺してしまふことは、いやでもあるし、またやろうともしないのだ。罪崇りを恐れているから、衆みなの者が連絡を取つて網を張り詰め、わたしに自害を迫っているのだ。四五日このかた往来の男女の様子を見ても、アニキの行動を見ても八九分通りは悟られて来た。一番都合のいいのは、帯を解いて梁はりに掛け、自分で縊くびれて死ねば彼

等に殺人の罪名がないわけだ。そうすれば自然願いが通つて皆大喜びで鼠泣きするだろう。しかし驚き恐れ憂い悲しんで死んでも、いくらか痩せるくらいでまんざら役に立たないことはない。

彼等は死肉を食べつつある！——何かの本に書いてあつたことを想い出したが、「海乙那かいおつな」という一種の代物がある。眼光めつきと様子がとても醜い。いつも死肉を食つて、どんな大きな骨でもパリパリと咬み砕き、腹の中に嘔のみ下してしまう。想い出しても恐ろしいものだが、この「海乙那」は狼の親類で、狼は犬の本家であ

る。先日趙家の犬めが幾度も乃公を見たが、さてこそ彼も一味徒党で、もう接洽ひきあひもすんでいるのだらう。あの親爺がいくら地面を眺めたつて、乃公を胡魔化すことが出来るもんか。中にも気の毒なのは乃公のアニキだ。彼だつて人間だ。恐ろしい事とも思わずに何ゆえ仲間を集めて乃公を食うのだらう。やっぱり永年ながねんのしきたりで悪い事とは思っていないのだらう。それとも良心を喪失してしまつて、知つていながらことさら犯しているのだらう。

わたしは食人者を呪う。まず彼から発起して食人の

人達を勧誘し、また彼から先手をつける。

## 八

実際この種の道理は今になってみると、彼等もわかり切っているのだ。

ひよつくり一人の男が来た。年頃は二十前後で、面相はあまりハッキリしていないが、顔じゅうに笑いを浮べてわたしに向つてお辞儀をした。彼の笑いは本当の笑いとは見えない。わたしは訊いてみた。

「人食いの仕事は旨く行ったかね」



彼はやつぱり笑いながら話した。

「餓饉年じゃあるまいし、人を食うことなど出来やしません」

わたしは彼が仲間であることにすぐに気がついた。人を食うのを喜ぶのだろうと思うと、勇氣百倍して無理にも訊いてやろうと思う。

「うまく行つたかえ」

「そんなことを訊いてどうするんだ。お前は本統ほんとうにわかるのかね。冗当を言っているんじゃないかな。きようは大層いい天気だよ」

天気もいいし月も明るい。だが乃公はお前に訊くつもりだ。

「うまく行つたかえ」

彼はいけないと思つてゐるのだろう。あいまいの返辞をした。

「いけ……」

「いけない？ あいつ等はもう食つてしまつたんだらう」

「ありもしないこと」

「ありもしないこと？」

狼村ろうそんでは現在食べてゐるし、

本にもちやんと書いてある。出来立てのほやほやだ」  
彼は顔色を変えて鉄のように青くなり目を睜みはつて  
言った。

「あるかもしれないが、まあそんなものさ……」

「まあそんなものだ。じゃ旨く行つたんだね」

「わたしはお前とそんな話をするのはいやだ。どうし  
てもお前は間違っている。話をすればするほど間違つ  
て来る」

わたしは跳び上つて眼を開けると、体じゅうが汗  
びっしよりになり、その人の姿は見えない。年頃はわ

たしのアニキよりもずっと若いがいっつはテツキリ仲間  
の一人に違いない。きつと彼等の親達が彼に教えて、  
そうしてまた彼の子供に伝えるのだらう。だから小さな  
子供等が皆憎らしげにわたしを見る。

## 九

自分で人を食えば、人から食われる恐れがあるので、皆疑い深い目付をして顔と顔と覗き合う。この心さえ除き去れば安心して仕事が出来、道を歩いても飯を食つても睡眠しても、何と朗らかなものである。ただこの一本の鬮しきい、一つの関所があればこそ、彼らは親子、兄弟、夫婦、朋友、師弟、仇敵、各々相識しらざる者までも皆一団にかたまつて、互に勧め合い互に牽制し

合い、死んでもこの一步を跨ぎ去ろうとはしない。

朝早くアニキの所へ行つてみると、彼は堂門の外で空を眺めていた。わたしは彼の後ろから近寄つて門前に立ち塞がり、いとも静かにいとも親しげに彼に向つて言つた。

「兄さん、わたしはあなたに言いたいことがある」

「お前、言つてごらん」

彼は顔をこちらに向けて頭を動かした。

「わたしは二つ三つ話をすればいいのだが、旨く言い出せるかしら。兄さん、大抵初めの野蛮人は皆人を食っていた。後になると心の持方が違って来て、中には人を食わぬ者もあり、その人達は質たちのいい方で人間に成り変り、真の人間に成り変った。またある者は虫ケラ同様にいつまでも人を食っていた。またある者は魚鳥や猿に変化し、それから人間に成り変った。またある者は善いことをしようとは思わず、今でもやはり虫ケラだ。この人を食う人達は人を食わぬ人達に比べてみると、いかにも忌わしい愧はずべき者ではないか。



おそらく虫ケラが猿に劣るよりももつと甚だしい。

えきが

けつちゅう

易牙が彼の子供を蒸して桀紂に食わせたのはずっと

昔のことで誰だつてよくわからぬが、盤古が天地を

かいびやく

開闢してから、ずっと易牙の時代まで子供を食い続け、

じよしゃくりん

易牙の子からずっと徐錫林まで、徐錫林から狼村で捉

まった男までずっと食い続けて来たのかもしれない。

ろうしやう

去年も城内で犯人が殺されると、癆症病みの人が彼の

血を饅頭に蘸ひたして食った。

あの人達がわたしを食おうとすれば、全くあなた一人では法返しがつくまい。しかし何も向うへ行つて仲

間入をしなければならぬということはあるまい。あの  
人達がわたしを食えばあなたもまた食われる。結局仲  
間同志の食い合いだ。けれどちよつと方針を変えてこ  
の場ですぐに改めれば、人々は太平無事で、たとい今  
までの仕来りしきたがどうあろうとも、わたしどもは今日特  
別の改良をすることが出来る。なに、出来ないとおつおつしやる被仰  
るのか。兄さん、あなたがやればきつと出来ると思う。  
こないだ小作人が減租を要求した時、あなたが出来な  
いと撥ねつけたように」

最初彼はただ冷笑するのみであつたが、まもなく眼

が気味悪く光つて来て、彼等の秘密を説き破つた頃には顔じゅうが真青になった。表門の外には大勢の人が立っていて、趙貴翁と彼の犬もその中に交つて皆恐る恐る近寄つて来た。ある者は顔を見られぬように頬かぶりをしていたようでもあつた。ある者はやはりいつもの青面あおづらで出齒でっばを抑えて笑つていた。わたしは彼等が皆一つ仲間の食人種であることを知つているが、彼等の考かんがえが皆一様でないことも知つている。その一種は昔からの仕来りで人を食つても構わないと思つている者で、他の一種は人を食つてはいけなないと知りながら、

やはり食いたいと思つてゐる者である。彼等は他人に説破されることを恐れているのでわたしの話を聞くとますます腹を立て口を尖らせて冷笑してゐる。

この時アニキはたちまち兇相を現わし、大喝一声した。

「皆出て行け、きちがい氣狂を見て何が面白い」

同時にわたしは彼等の巧妙な手段を悟つた。彼等は改心しないばかりか、すでに用心深く手配して氣狂という名をわたしにかぶせ、いずれわたしを食べる時に無事に辻褄を合せるつもりだ。衆みなが一人の悪人を食つ

た小作人の話もまさにこの方法で、これこそ彼等の常用手段だ。

陳老五は憤々ふんぷんしながらやって来た。どんなにわたしの口を抑えようが、わたしはどこまでも言つてやる。「お前達は改心せよ。真心から改心せよ。ウン、解つたか。人を食う人は将来世の中に容れられず、生きてゆかれるはずがない。お前達が改心せずにいれば、自分もまた食い尽されてしまう。仲間が殖ふえれば殖えるほど本当の人間に依つて滅亡されてしまう。獵師が、狼を狩り尽すように——虫ケラ同様に」

彼等は皆陳老五に追払われてしまった。陳老五はわたしに勧めて部屋に帰らせた。部屋の中は真暗で横梁よこはりと椽木たるぎが頭の上で震えていた。しばらく震えているうちに、大おおいに持上つてわたしの身体の上に堆積した。

何という重みだろう。撥ね返すことも出来ない。彼等の考は、わたしが死ねばいいと思つているのだ。わたしはこの重みが謔うそであることを知つているから、押除おしのけると、身体中の汗が出た。しかしどこまでも言つてやる。

「お前はすぐに改心しろ、真心から改心しろ、ウン解つ

たか。人を食う奴は将来容れられるはずがない」

## 一一

太陽も出ない。門も開かない。毎日二度の御飯だ。

わたしは箸をひねってアニキの事を想い出した。

解った。妹の死んだ訳も全く彼だ。あの時妹はようや

く五歳になつたばかり、そのいじらしい可愛らしい様

子は今も眼の前にある。母親は泣き続けていると、彼

は母親に勧めて、泣いちゃいけないと言つたのは、大

方自分で食つたので、泣き出されたら多少気の毒にも



なる。しかし果して気の毒に思うかしら……

妹はアニキに食われた。母は妹が無くなったことを知っている。わたしはまあ知らないことにしておこう。

母も知ってるに違いない。が泣いた時には何にも言わない。大方当り前だと思っているのだろう。そこで思い出したが、わたしが四五歳の時、堂前に涼んでみるとアニキが言った。親の病には、子たる者は自らひととき一片の肉を切取ってそれを煮て、親に食わせるのが好き人というべきだ。母もそうしちやいけないとは言わなかつた。一片食えばだんだんどっさり食うものだ。

けれどもあの日の泣き方は今思い出しても、人の悲しみを催す。これはまったく奇妙なことだ。

想像することも出来ない。

四千年来、時々人を食う地方が今ようやくわかった。わたしも永年ながねんその中に交っていたのだ。アニキが家政のキリモリしていた時に、ちょうど妹が死んだ。彼はそつとお菜の中に交せて、わたしどもに食わせた事がないとも限らん。

わたしは知らぬままに何ほどか妹の肉を食わない事

がないとも限らん。現在いよいよ乃公の番が来たんだ

……

四千年間、人食いの歴史があるとは、初めわたしは知らなかったが、今わかった。真の人間は見出し難い。

人を食わずにいる子供は、あるいはあるかもしれな  
い。  
救えよ救え。子供……

(一九一八年四月)



狂人日記

魯迅 著 井上紅梅 訳

[\[青空文庫図書カード\]](#)

底本：「魯迅全集」改造社

1932（昭和7）年11月18日発行

※「訂字、別紙名で書かれた作品名、異代表記にあたる際の作業制約」に基づいて、底本の表記をあらためました。  
その際、以下の置き換えをおこないました。

「狂奴→あいつ 貴郎→あなた 或→ある・あるい（は） 如何なる→いかなる ～敷く→～いただく 一体→いったい ～固→～お 恐らく→～おそろく か知ら→～かしら 乾度→～きつと 似→～くらい ～呉れ→～くれ 此奴→～こいつ 幾度→～ことさら 此間→～こないだ 此→～この ～脚覽→～ごらん 替→～かえて ～仕舞う→～しまふ ～知れない→～しれない 頗る→～すこぶる 新角→～せつかく 其(の)→～その 大分→～だいぶ 伊山→～たくさん 只→～ただ 想ち→～たらまち ～船先→～たまたま 丁度→～ちょうど 一寸→～ちよつと 何処→～どこ 達ち→～とても 中々→～なかなか 善→～はず 只管→～ひたすら 程→～ほど 正に→～まさに 況して→～まして 先ず→～まず 又、亦→～また 未だ→～まだ 丸切り→～まるきり 丸で→～まるで 幾度→～まんざら ～見た→～みた 若し→～もし ～買う→～もらう 欠面(り)→～やはり 處に→～わずかに」

※底本は絶たびですが、一部を書きました。

入力：京都大学電子テキスト研究会入力班（上村要）

校正：京都大学電子テキスト研究会（高柳典子）

2004年11月19日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

PDF 変換

Editor : Tomoyuki Kawano

Tools : MacOS X 10.6.3(合成) + egword universal 2.0.2

Fonts : Web-O-Mints + DT Flowers + ヒラギノ